

編集後記

2013年の初夏、植田和弘研究科長（当時）から、2015年7月に『経済論叢』が創刊100周年を迎えるので、それに相応しい記念企画を考えてほしい旨のお話があった。記念講演会などのイベント的な行事は別途執行部で考えるので、後々記録として残る記念号のようなものを編集・刊行してもらいたいというのが、そのときの大まかな指示内容であった。

そのような経緯があり、2013年10月7日に開催された経済論叢創刊100周年記念号刊行委員会の第1回会合では、「100周年記念号の編集・刊行について」が主たる議題とされた。記念事業として何を行うかではなく、記念事業をどのように行うかを考えることが、本委員会に課された基本的な任務であった。

100年の歴史を織りなす先達の論文を、解題を付して編集・再掲するという企画をまとめるのにそれほど時間は要しなかったが、具体的にどの論文を、どのような理由で、選択するかについては、多くの時間を費やした。100年の歴史を10編余の論文の編集・再掲で縮約しようというのであるから、それは当然といえば当然であった。本委員会の委員がその選択作業に当たったが、委員がカバーしきれない分野については、当該各分野を専攻するファカルティ・メンバーに協力をお願いした。協力頂いたのは、依田高典、久本憲夫、堀和生、諸富徹、渡辺純子の各教授である。ちなみに、選択の任に当たった者が、その選択理由を説明するという趣旨で、各再掲論文の解題を執筆している。現ファカルティ・メンバーから寄せられた新稿2本も現代編に収録し、『経済論叢』を舞台にした研究活動100年の区切りとした。

『経済論叢』が100年の時間に耐えて、今日なお刊行され続けている理由と意義は何か。それを考えることは、『経済論叢』と経済学部の日

を展望することにもつながるであろう。八木名誉教授の特別寄稿と牧野論文は、この問題を真正面から論じている。

八木紀一郎名誉教授は、本研究科退職後、多忙を極めておられると聞いていたが、本委員会の原稿依頼を即座にご快諾くださり、またいち早く原稿をお寄せくださった。

本研究科OBの牧野邦昭氏には、学外委員をお願いした。近代日本経済思想史に関する造詣の深さでは、余人をもって代えがたいと判断されたからである。牧野氏は、つごう10回にわたって開催された委員会に欠かさず出席された。牧野氏の献身的な活動がなければ、本記念号の学術的価値は半減していたであろう。

北田雅講師には、本委員会の事務局をお願いした。膨大かつ煩雑な事務をいつも手際よく処理して頂いた。植田研究科長に、100周年記念事業を最初に提案したのは、じつは北田講師であった。本事業にまつわる1つの逸話として、記録に残しておきたい。

この記念事業は、以上の方々の無私の献身に支えられている。記して謝意を表したい。

先達の論文の再掲に際しては、公表当時の書式等を可能な限り維持するよう努めたが、読者の便宜を考慮し、次のような編集を施した。縦書きの論文は横書きに改めた。段組は、現行の2段組に統一した。旧字体は新字体に改めた。年代や頁の漢数字は算用数字に改めた。掲載時の明らかな校正ミスは、委員会の判断で適宜修正した。

本記念号は、『経済論叢』の100年を回顧したものであるが、それは現在のわれわれの時代認識を映し出す鏡ともなっている。100年後のファカルティ・メンバーたちは、本記念号をどのように読むのだろうか。期待と不安を抱きつつ、この編集後記を結ぶことにしたい。

藤井 秀樹